

# 世界中を席巻する新型コロナウイルス いま・・・新平の検疫事業に注目

## 新平の検疫事業（125年前、日清戦争に従軍した帰還兵 23 万人余に実施した検疫事業）

明治 10 年の西南戦争の際、コレラが蔓延し、発病者 1,018 名、死者 502 名に上りました。この時、野戦病院から送還させる重病患者を收容し治療する施設として大阪陸軍臨時病院が建設されました。病院長は石黒忠憲<sup>ただのり</sup>であり、愛知県病院で勤務していた後藤新平が修行の好機ととらえ、希望してこの臨時病院の傭医となり、腕を磨きました。

明治 28 年の日清戦争終結時、野戦衛生長官であった石黒忠憲は、西南戦争の際にコレラの蔓延を防ぎきれなかった苦い経験から、1月20日、陸軍大臣に戦後防疫の建議書を提出し、それが実行されることになりました。

3月30日、臨時陸軍検疫部が組織され、部長に武官（軍人）である児玉源太郎、事務官長に文官（行政官）である後藤新平という辞令が発令され、一切の事務はほとんど文官事務官長に一任されました。

4月3日、関係者会議を開催し、検疫実施上の技術的大方針を決定します。似島（宇品付近）、彦島（下関付近）、桜島（大阪付近）の検疫所を設けて 23 万人もの凱旋軍の検疫を行うという前古未曾有の大計画です。7月からの開始を想定すると、その完成期限はわずかに3ヶ月。その間に、海を埋め、樹を切り払い、地ならしをし、家を建て、屋根を葺き、諸道具一切を運び込み、電信、電話、電灯の設備をなし、加えて、その間に全く類例のない大消毒汽缶を製造して備え付けるといいますから、まさに太閤の一夜城にも比すべき大工事でした。ただでさえ、人間業の仕事ではないと言われていたものが、凱旋兵の帰還が1ヶ月早まることになったため、検疫所の工事はまるで戦場のような有様となり、新平自身も3時間以上寝たことがないという生活を続け当日を迎えることとなります。

6月1日から始まった検疫事業が8月に入るとほぼ終了しました。この間、検疫総船舶数は 687 艘、検疫総人員 232,346 人、全消毒船舶 16 艘、局部消毒 290 艘、船内伝染病患者コレラ 369 人、コレラ疑似 313 人、腸チフス 126 人、赤痢 179 人、痘瘡 9 人、計 996 人、停留人員 46,699 人でありました。

世界の歴史始まって以来の大検疫事業で、後に編纂された「臨時陸軍検疫部報告摘要」は和文と英文との二様に作成され、陸軍省から欧米諸国に寄贈されましたが、ドイツ皇帝がこれを読んで、「戦争に勝った国はいくらでもあるが、あと始末をきちんと行った国は少ない。日本は凄いな」と激賞したと言われています。



## 緊急特別展開催

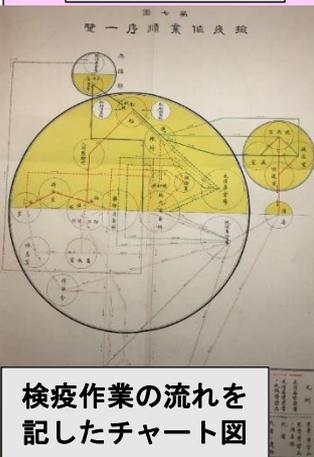
資料を整え、3/17～4/19 まで急速「緊急特別展」を開催することにしました。以下は、取材いただいた報道機関です。岩手めんこいテレビ・水沢テレビ・胆江日日新聞・岩手日報・岩手日日新聞・読売新聞・岩手朝日テレビ・IBCラジオ



検疫所の設置



似島臨時陸軍検疫所の全景



検疫作業の流れを記したチャート図

伝染性の患者は直ちに避病院（隔離施設）に送り、疑わしい患者は一時疑症室に移し、その結果、疑似の症状を呈したものは避病院に送り、暫くして治癒したものは、沐浴消毒の上帰舎させる。



【児玉源太郎の奇智】全ての準備を整えた新平が心配したのは、鼻息荒い凱旋兵が素直に検疫を受けてくれるかどうか。児玉に相談すると、「それは訳はない、俺に名案があるから。」と言い、全ての帰還兵に検疫を受けさせることに成功します。

【蒸汽消毒汽缶の成功】大蒸汽消毒汽缶（ボイラー）の性能試験を行ったのが、新平の親友、北里柴三郎。従来蒸気消毒時間は、百度の熱気中に1時間置くことを常としていたが、この消毒缶は、30分間で確実な成績を収めた。

